

書 評

佐藤淳一著
『ユングのタイプ論に関する研究「こころの羅針盤」
としての現代的意義』
(箱庭療法学モノグラフ第21巻) 創元社

坂 井 祐 円

◇本書の目次

- 序 章 ユングとタイプ論
- 第1章 ユングのタイプ論に関する研究の展望と
本書の構成
- 第2章 心理学的タイプの既存尺度の再検討と新
たな尺度の作成
- 第3章 心理学的タイプと他のパーソナリティ特
性との関連
- 第4章 心理学的タイプと投射反応、箱庭作品、
描画作品との関連
- 第5章 心理臨床家における心理学的タイプと心
理療法の学派・技法のオリエンテーション
- 第6章 心理学的タイプの個性記述的アプローチ
- 第7章 共存性を考慮に入れた心理学的タイプ測
定尺度 (JPTS-C) の作成
- 第8章 まとめ

◇はじめに

C.G.ユングは、「集合的無意識」や「元型」の概念を示したことでよく知られており、今日の臨床心理学の基礎づけや方向づけに貢献したビッグネームの一人である。このユングが、初期の研究において人間の性格傾向のタイプ論を唱えていたことは意外と知られていない。もちろんユング心理学の入門書を開けば、タイプ論のことは最初のほうに必ず書いてはいる。タイプ論に関する論文も古くからいくつかあるが、けれども、その専門的な研究書となると、国内ではこれまでほとんど出ていなかったと言って

よいだろう。本書は、その意味でも、ユングのタイプ論、ひいては人間の性格傾向について本格的に考えていくための、それこそ「羅針盤」の意義を担っていると言えるだろう。

評者は、本書の著者である佐藤淳一氏が、上越教育大学にて教鞭をとっておられた頃に知り合い、その際にユング心理学と実証主義心理学とのコラボレーションについての新たな知見を教えていただき、佐藤氏のもつ類まれな分析力と研究への情熱に感銘を覚えたことがあった。ユング心理学は実証主義とは相性が悪いと一般的に考えられているが、佐藤氏はそうした見方を払拭したいとの思いから、ユングのタイプ論に注目したと話されていた。その成果はとりわけ本書の第2章と第7章に示されている、と評者には感じられた。ここではユングのタイプ論に基づく心理学的タイプの既存尺度を再検討するとともに、その上で佐藤氏自身が精度の高い心理学的タイプの測定尺度の新たな作成を試みて、その信頼性と妥当性を検証している点で、まことに圧巻である(本書 p.81-100)。

本書は、あとがきにあたる「謝辞」にも述べられているが、2007年に甲南大学大学院に提出し審査を経て学位を授与された博士論文をベースに大幅に加筆修正したものである。評者が知り合った頃の佐藤氏は、ちょうど博論の執筆を終え、そこから応用的に研究を進めておられる時期だった。博論を書籍にされる予定についてお聞きした際にしばらく時間がかかるといった旨をお話していたように記憶してい

るが、この度、佐藤氏の博士論文が本書として上梓されたことを心よりお祝い申し上げたいと思う。

◇ユングのタイプ論について

ここで、ユングのタイプ論とはどのような学説なのか、本書の記述に沿って簡単に整理しておこう。ユングによれば、個人の心理学的タイプは「一般的態度」と「心的機能」の2つの側面からなるという。一般的態度とは、心的エネルギーの基本的な方向性を規定するものであり、これには「外向 (Extraversion)」と「内向 (Introversion)」の2つの向性概念がある。一方、心的機能とは、現実世界と関わる際に個人がどのような適応をするのかを決定する機能のことを指し、「思考 (Denken, thinking)」、「感情 (Fühlen, feeling)」、「感覚 (Empfindung, sensation)」、「直観 (Intuition, intuition)」の4つの次元から構成される。これらの関係は両極の軸としての組み合わせと考えることができ、一般的態度の〔外向 (E) — 内向 (I)〕の組み合わせを基調としながら、〔思考 (T) — 感情 (F)〕ならびに〔感覚 (S) — 直観 (N)〕という2つの心的機能の組み合わせを見出すことができる。これらの組み合わせは互いに相反する関係をもっており、どちらか一方の性質が意識に現れると、もう一方の性質は無意識に沈み込むといった関係になると考えられている。また、性質の逆転も状況によっては個人の中で起こり得るとされている。こうして、これらの組み合わせを掛け合わせると、8種類のパーソナリティ傾向の類型が出来上がることになる。すなわち、外向的思考タイプ (ET)、内向的思考タイプ (IT)、外向的感情タイプ (EF)、内向的感情タイプ (IF)、外向的感覚タイプ (ES)、内向的感覚タイプ (IS)、外向的直観タイプ (EN)、内向的直観タイプ (IN)、である。

それぞれのパーソナリティ傾向を記述していくと、およそ人間はみなこれら8種のタイプのどれかに当てはまると予想されることになるが、本書でも検討されているブリッグス・マイヤーズ母娘が開発し

た尺度では、さらに「判断 (Judgment)」と「知覚 (Perception)」という性質が加えられている。そして、この2つも相反関係であるとして、〔判断 (J) — 知覚 (P)〕の組み合わせを新たに設けた性格分類を作成している (マイヤーズ・ブリッグス・タイプ指標MBTI, 1962年)。ここから16種類の性格タイプのいずれかに分類する「性格診断テスト」が作成され、近年では国内の就職試験などで広く用いられている。このように性格タイプの性質の因子は、今後も発見され拡大していく可能性もあり得ることを示唆している。ここには、いわゆる類型論の一つの特徴が表れているとも言える。

とはいえ、類型論というのは、静的な分類箱になりがちである。パーソナリティ理解にとっての類型論は、あくまで手段であって分類すること自体が目的になってしまっただけでは本末転倒である。ユングのタイプ論の視点は確かに類型論であるが、決して固定的ではない。心的機能の組み合わせの座標軸上において、個人のパーソナリティがどのように変わりうるのかを見ていくからである。このことはユング心理学の特徴とも言えるが、ユングは意識と無意識との関係を相補性として互いに補償し合うダイナミズムと見ており、こうした心の理解がタイプ論には明確に反映されているのであって、これによりパーソナリティに現れる矛盾点を捉えることが可能となるのである (本書p.37-38)。

◇臨床場面でのタイプ論の応用的活用

本書によれば、ユング以降のユング派分析家によって、タイプ論は具体的な臨床場面において活かされているとし、主に①個性化過程との関係、②優越機能と劣等機能を活かした臨床実践、③治療関係におけるタイプ論の応用という3つの観点から考察されている。ここではまず、セラピストとクライエント双方のパーソナリティを意識と無意識の力動性から捉えることを強調した上で、思春期や青年期のような人生前半の課題は、自我意識を築き上げ、自尊心の向上と外的環境への適応を優先させることに

あるので、心的機能の中では劣等機能を強化させることよりも優越機能を伸ばすことを支持し援助することのほうが治療的に有効であるとするサンドナーとビービの見解を挙げている（本書p.45）。さらに、セラピストの心理学的タイプと臨床実践の特徴について考察したクエンク夫妻の論文を取り上げて、思考タイプのセラピストは論理的解決志向をもち、感情タイプでは共感的理解が得意であり、感覚タイプでは現実適応を重視し、直観タイプではクライエントの問題の本質を一瞬で見抜く力をもつ、といった特徴があるという見解を示している（本書p.46）。また、シンガーの論文を取り上げ、セラピストの養成や訓練においては、タイプ論の教育が最重要のテーマの一つであるとし、自身のタイプの特徴を知ることが治療関係への具体的なアプローチになる、という見解も示している（本書p.46）。

このタイプ論を臨床場面や心理検査において活用するために、本書ではいくつかの研究デザインが描かれている。本書の第4章、第5章、第6章はこれに充てられている。

第4章では、投影法を用いた心理検査や心理作品の制作との関連を実証的に研究している。1つ目は、ロールシャッハ・テストの反応によって分類された体験型である「内向型 (intro-version)」と「外拡型 (extra-tension)」と、タイプ論の向性概念との関連についての実証的研究、2つ目は、箱庭作品において、制作者の心理学的タイプと評定者による印象評価との関連についての実証的研究、3つ目は、バウムテストもしくはバウム作品の制作者の心理学的タイプと評定者の心理学的タイプとの相関性、印象評価との関連についての実証的研究である。ロールシャッハやバウムは、とりわけ病院臨床では広く用いられている心理検査であり、これらの研究を通して、被検者と検査者それぞれの心理学的タイプを見出し、その相関から被検者の反応や表出の評価の在り方を考えることができる。また、箱庭作品の印象評価の問題は、他の描画法や芸術療法でも応用が可能である。

第5章では、心理臨床家の心理学的タイプとそれぞれの心理療法の学派や技法との関連を実証的に調査している。心理臨床には様々な学派があるが、どの学派を選ぶのかは心理学的タイプによって決定してくるというのは納得がいくように思われる。学派が異なると、互いに相性が合わないなどとしてすぐに批判的になることは往々にしてあるが、このことをタイプ論から捉えることで相対化が可能になり、学派や技法の相違を超えて相互の理解につながるかもしれない。被検者である心理臨床家には、学派として親和性のあるもの、心理療法の技法のオリエンテーションとして親和性のあるものをそれぞれ選んでもらい、心理学的タイプとの関連を測った。この研究では、おおよそ以下の軸が示されている。ロジャーズ派—クライエント中心療法、認知行動派—認知行動療法、ユング派(分析心理学派)—芸術療法・夢分析、精神分析派—転移分析・自由連想法、である。他の学派や技法ももちろん挙げられているが、考察の焦点が主にこの軸に絞られている。本書では学派の一つとして家族療法派が取り上げられているが、これは技法と考えてもよいではないか、もしくは学派の分類として出ていなかったが、ナラティブ派との関連が強いのではないかと思われた。家族療法の位置づけには検討が必要であろう。本書の考察によると、ロジャーズ派は、タイプの優勢・劣勢の特徴が少なく、中立的で平均的であるという。一方で、ユング派は、直観機能が優勢であり、内向的傾向も示されたが、感覚機能が劣等であるため、現実適応などの問題は重視しない傾向がある。精神的な目的論をもち、過去に原因を求める因果論的思考より、未来志向をもっている。ただし本研究は、日本人に限定しており、日本人はパーソナリティに極端な傾向を示さないという特徴があり、タイプ論がうまく適合しにくいとする河合隼雄の指摘も挙げられているが、その実情がまさに反映されているようにも思われた。

第6章では、質的研究におけるタイプ論の活用について取り上げている。短大生、大学生、院生に面

接調査を行い、その結果を個性的記述アプローチによって記録し、被験者の心理学的タイプとの関連を検討するという方法である。面接での質問課題としては、一般的態度、判断機能、知覚機能のそれぞれを測るための課題、場面想定法による共感イメージ課題、絵画作品への感受性反応課題が挙げられている。また、とくに内向的感情タイプ（IF）に焦点化して考察が進められている。

このようにユングのタイプ論は、具体的な臨床場面でかなり応用的に適応が可能であることが、本書から伺うことができる。本書でも述べられているが、タイプ論はおよそ自我機能の表出を捉えている側面があり、どうしてもスタティックで固定的にみられがちである。本書で進められた研究デザインにおいても、そうした傾向は否めないものであろう。しかし、その点についても佐藤氏は鋭く省察されており、その成果である第7章では、両極化する心的機能の軸を共存性として捉えることができるのではないかと問題提起し、共存性を考慮に入れたタイプ論の尺度を作成することを試みている。その点で、本書の問題意識は、ユングのタイプ論のダイナミズムの本質が深く継承されており、心理臨床の治療場面での心の変容過程を考える上で、新たに作成した尺度の意義が発揮されるかもしれない。

本書は、実証主義を基調としながらも、あくまでユング心理学の本質を見失わない優れたアプローチを描いており、その洞察力は見事と言うほかない。自身のパーソナリティ傾向を自覚しつつ臨床を深めたい人にとっては、まさしく「羅針盤」となる一冊であろう。